基督教研究 第二十六卷第二號

新刊紹介

H. Richard Niebuhr
Christ and Culture

New York: Harpers, 1951
259+x pp. $3.50

現代米國神學界に於ける壯觀の一つは、Reinhold Niebur と H. Richard Niebubr の二人の兄弟が、米國に於ける神學校の双壁 Union Theological Seminary と Yale Divinity School に於て、それぞれ何れも基督教倫理を講じている事實である。Richard は Reinhold に比し著述も少なく、米國以外に於てはあまり廣くは知られていない。しかしその基督教思想界に對する貢献の點に於ては、兄同樣に大なるものがある。Reinhold は預言者的傳統に立つ者と見られ、Richard は寧ろ現代の聖者と評されるのだが、彼をよく識る者にとつてその評價は兄に優るとも劣らない。

本書に於てニーバーは、最近の神學界の問題である基督(若くは基督教)と文化の關連を論ずる。本書の構造はこの問題についての Motif を五つに分類することに於て成立つている。兩極端に基督と文化の對立を强調する人々 (Tertullian, Tolstoy, etc.) と基督と文化の一致 Agreement を主張する人々 (Gnosticism 近代自由主義——その代表者として Ritschl) が擧げられている。この兩者の間に更に包括的でしかも夫々全く異つた三つの立場が存する。第一は Aquinas に於て最もよく代表される綜合的タイプ (Synthetic Type) で、基督はその獨自性を失うことなしにしかも文化の完成者とされる。第二は、Dualistic 或は Christ and Culture in Paradox の立場で、パウロと Marcion 特に Luther が論ぜられる。第三は、基督を Transformer of Culture とするもので Augustine や F. D. Maurice が論ぜられている。

ニーバーは、これら五つの motifs を基督教の歴史に於て常に繰返えし現われたテーマとして跡づけ、しかも夫々基督教思想の發展に積極的な貢献をなしたと信ずる。各立場の長短について理解深い論述がそれぞれの章に於てなされている。著者は各テーマを明瞭ならしめる爲にこれら多くの思想家を拉し來るが、しかし一人物が單一の立場をのみ代表するものとは考えていない。各思想家がその代表すべく選ばれたタイプから異つている點をも彼は周到に論じている。最後の章は、出版社の要望によつて附加されたものであるが、遺憾にして本書の主要部分に何ら積極的な役割を演じていない。別の論文の冒頭を構成すべきものであつたのかも知れぬ。

ここで本書の豊かな内容と明晳な分析について詳述することは不可能であるが「基督と文化」の問題に不案内な讀者にとつてよき概説書と云えよう。しかし本書は又專門家にとつても實に優れ

た業作である。前述の motifs を抽出し、その歴史的跡づけを行い、その提示に於ける洞察の深さと明晳さとに於ては現代神學界稀に見るものである。今日反對の見解をカリカチュア化したり、そのカリカチュアを批判するに留る如き傾向が存するが、本書は種々の立場に立つ諸眞理を公平正直に示してくれる。この點に於て、本書は基督と文化の問題の論義に於ける一つのプロレゴメナとして見られてよかろう。

斯く本書より多くを學ぶ反面、又いくつかの疑問も殘る。motif の二つに對しては聖書的根據が與えられていない。motif 分類に際して新約の或る書が果して根據として用いられ得るか否かという疑問もある。例えば Christ against Culture のタイプにヨハネ第一書を結合することが可能なるや否や。又第二 mtiof の The Christ of Culture が正統の基督教の motif であるより寧ろ異端に近いのではないかという疑問も起る。

しかし最大の問題は恐らく著者の用いた方法とその持つ意味に存するであろう、彼は五つの立場を見事に分つている。しかし新約聖書の記錄に於ては斯かる區別は存しない。新約の著書達は全體としてこれらの motifs を同時に證言して居り、彼らの思想はどの立場を以てしてもそれだけで完全に表現し盡し得るものではない。この邊に種々重大な問題が有するのではなかろうか。即ち、如何なる motifs が新約聖書には一體として考えられているのか、どの樣にしてそれらは一體として見られているか、その中で主要なテーマをなすのは何れで、補助的位地にあるものはどれであるか、特殊の歴史的環境を反映するものは何れか、又各 motifs の間の關係は如何、等々。宗教改革の立場からみれば、第四、第五の motifs こそ基督と文化の關連の問題を解くに最も適するものであろう。今日の代表的神學者の見解—バルト、ブルンナー、ラインホルド・ニーバー等——も程度こそ異れ要するにこの二つの流れを引くものである。故に紹介者の前述の不滿は恐らくここに根ざすものであろう。筆者は各 motifs 間の關係を解明する爲の建設的研究の實際的な重要さを認めることによつて基督と文化の問題解決に歩を進めたが、しかし他面、彼の考えでは、「究極の解答」を求める努力はすべて、有限なる人間にとつて結局不可能事に屬し、かかる究極の解答を信ずることは基督の主性を冒すことに外ならない。しかしながら我々はやはり、この努力を推進すべきことを主張せねばならぬ。謙虚な仕方に於てではあるが。斯かる試みは基督教會の歴史を通して多くの俊秀によつて行われて來たものなのである。ニーバーのこの書の價値は、この問題を新らしい視野に持ち來すことに貢献した點に存する。廣く讀まるべく書であろう。

（ウッド、土肥譯）

新刊紹介

Oscar Cullmann

Die ersten christlichen Glaubensbekenntnisse

Zürich: Evangelischer Verlag

1949², SS. 60